古道調査・秩父往還（三富～雁坂峠～川又）下見調査報告書

2022.11.19

日　時　：令和４年 11 月５日（土曜日）～11 月６日（日曜日）

メンバー：L 中嶋信隆、山崎保夫、渡邉嘉也、浅田　稔、松本敏夫（計５名）

コース記録：

〇11 月５日（土曜日）：天候・曇り（一時、霰）

塩山駅(8:53－9:05)山梨交通バスー道の駅・みとみ(10:00-10:20)～雁坂峠登山口(10:22)～久渡の沢橋（10:28）～茶色の道標「雁坂峠登山道入口」～標識「雁坂峠登山口」及び登山道ガイドマップ（三富村）（10:33）～倒れた古い道標「雁坂峠（矢印)」(10:36）～道標「雁坂峠－広瀬（矢印)」(10:39)～雁坂トンネル高架橋下（10:43）～雁坂トンネル有料道路料金所（左下）（10:57）～沓切沢橋（11:41）～道標「雁坂峠－広瀬・道の駅」(11:43)～標識「ナメラ沢へ」(11:53)～渡渉（大きな沢）（11:59）～昼食（12:10～12:20）～トラロープ設置（右側）（12:27）～渡渉（小さな沢）（12:35）～道標「広瀬－雁坂峠」(12:36)～丸木橋（腐れかかった３本の丸太）（12:43）～道標「広瀬－雁坂峠」（木製で茶色地に白文字）（12:54）～トラロープ設置（左側に 10ｍほど）（12:55）～古い金属製道標「広瀬－雁坂峠」(13:03）～渡渉（小さい沢）（13:31）～ササ原（13:39）～道標「雁坂峠－広瀬」（茶色地に白文字）（13:55）～カラマツ林（14:00）～ササ原と針葉樹林（14:20）～雁坂峠・道標「日本三大峠・雁坂峠 2082ｍ」及び「秩父多摩甲斐国立公園地図」(14:41－14:50）～「秩父山地緑の回廊」(14:51）～道標「雁坂峠・甲武信ヶ岳－水晶山・雲取山」の分岐（15:08）～道標「川又 9.5KM、30ｍ下水場－雁坂峠」・雁坂小屋（泊）（15:09）

〇11 月６日（日曜日）：天候・晴れ

雁坂小屋（6:45 発）～松の大木に標識「水　左横」(6:46）～標識「この先冬季凍結の恐れあり、滑落注意！　埼玉県」(6:48）～左側に水道管がある沢のトラバース（6:53）～渡渉（大きな沢の上部に貯水槽がある豆焼沢の最上部）（7:17)～標識「迂回路」(7:24）～標識「迂回路」(7:36）～アセビの道（7:58）～クサリ場（左側）（8:00）～朽ちた道標「雁坂峠－川又 7.2km」(8:31)～「地蔵岩展望台」分岐・道標「地蔵岩」・「雁坂峠 3.2km－川又 7.3km」（8:39－8:47）～地蔵岩（8:47）～」地蔵岩展望台」分岐（8:54）～右側に古い道標「雁坂峠－川又」(9:11）～赤い金属の「境界見出標・東京営林署」及び石標（9:13）～大木につけられた標識「足元注意・ここはだるま坂、この先ずっと下り坂です。川又へ 6.8km」(9:18)～アセビに覆われたササ尾根の明るい道(9:32)～樺小屋・道標「川又 5.6km－雁坂峠 4.5km」（9:50－10.02）～アカマツの根元に看板「東京大学科学の森里親」(10:42）～突出（つんだし）峠・道標「川又 5.5km－雁坂峠・雁坂小屋 5.3km」(10:44）～「東京大学の森」育成基金記念樹・ブナの大木（10:47）～カラマツ林（11:08）～看板「人口植栽地・カラマツ・シラベ、東京大学農学部秩父演習林」(11:11）～道標「川又－雁坂峠－行き止まり」(11:17)～朽ちた道標「川又－雁坂峠」(11:28）～小さな標識「R140」分岐（11:31）～道標「雁道場」(11:33）～腐食した丸木橋（11:49）～杉の巨木に道標「雁坂」～道標「雁坂峠－川又」

及び標識「水の本」（11:58）～道標「川又－雁坂峠」・石の道標「後ハ栃本ヲ経テ三峯山及ビ秩父方面ニ至ル、右ハ甲州旧道」（12:44）～鉄パイプとアルミ板の橋（12:49）～山の神の祠（？）（12:50）～道標「川又方面→」（12:52）～国道 140 号・道標「雁坂峠登山口」及び「雁坂小屋・雁坂峠」（12:55）～入川橋（13:10）～川又バス停（13:16－14;16）－三峰口駅（15:00）

記録

秩父往還は埼玉県（旧武蔵国）と山梨県（旧甲斐国）とを結ぶ古くからの交易路・生活路であり、甲州街道の裏街道としての役割も果たしました。江戸から秩父（旧大宮）を経由して甲州に向う「旧秩父往還」には、熊谷、川越、吾野経由など数種のルートが考えられますが、今回の山岳古道調査では、熊谷から寄居、皆野、秩父、贄川宿、栃本関所跡、雁坂峠、川浦口留番所跡までの主として埼玉県側の秩父往還（現在の国道 140 号）を対象と考えております。また、日本山岳会の創立 120 周年記念事業としての全国山岳古道調査ですので、山岳部分の古道調査が主要な目的と考えられます。そのため主として山岳地域である贄川宿（三峰口駅）から、落合・麻生・栃本・川又から地蔵岩、雁坂小屋、雁坂峠、道の駅みとみ（または川浦口留番所跡）までの調査が現実的と思われます。

「雁坂峠越え」の古道は江戸時代以前から、甲州側からは三峯神社（旧三峯山）、宝登山神社、秩父神社（旧妙見宮）、秩父札所三十四所観音霊場など、武州側からは甲斐善光寺、身延山、富士山等の参詣路や巡礼路であると共に、明治から大正に掛けては繭を担いで雁坂峠を頻繁に越えたと伝えられております。また雁坂峠越えは、古くから甲州と武州の交易路や生活路でしたが、古代史を代表する英雄として知られる日本武尊が越えた伝説を残す雁坂峠でもあります。古から数多くの伝説を残すためか、一般的に雁坂峠は、針ノ木峠、三伏峠と共に日本三大峠の一つとしても知られる埼玉県を代表する峠です。

秩父往還「雁坂峠越え」に関する古道調査の一環として、既に、贄川宿（秩父鉄道・三峰口駅）から落合・麻生・栃本を経て川又までの下見調査は実施済です。詳細は古道調査・秩父往還関連下見調査報告書（贄川宿～落合、三峰口～落合、落合～大久保、二瀬～宮平、二瀬～栃本～川又など）を参照ください。日本三大峠の一つとして雁坂峠は知られていますが、選定された根拠は必ずしも明確とは思われません。「雁坂峠越え」を実際に歩いて調査することで、確認できることもあるものと考え古道調査を実施しました。

新編武蔵風土記稿・秩父郡の古大瀧村の条に「東西に一條の往還あり、秩父より甲州へ通ふ一路なり、西の方、古大瀧村の内雁坂峠を越へ、甲州界まで両村に亘り凡七八里、道幅六七尺、但し栃本の西川又あたりよりは、漸々と幅も狭く人行も稀なれば、茅など生ひて小径なり、」また「雁坂峠　御林山の内にて、甲州への一路國界の峠なり、栃本より坤にあたり、４里４丁漸上る、」と記されている古道です。秩父往還の道幅が 6～7 尺と記されておりますので、2 メートル程度と推測されますが、雁坂峠周辺の道幅に関して現在はどの様な状況なのか興味を惹かれるところです。

一方、甲斐國志（松平定能編）には「雁阪口　秩父街道トモ云、小原ヨリ北行シテ一二三ノ橋アリ、笛吹川ニ沿ヒテ上ル路總テ河浦入ト云、天科（あましな）ニ國堺ノ番所ヲ置ク、小原ヨリ六里府中ヨリ九里餘、是ヨリ雁阪嶺ノ上國堺ニ至ル四里八町ナリ、武州秩父郡栃本ノ番所ニ出ツ、峠上下凡ソ八里無人ノ境也、栃本ハ太田基（おおたき）ニアリ、西ノ方信州に越ハル路十文字嶺ト云フ、同州大宮マデ拾五里許」と記され、川浦口留番所（天科）より甲斐国境である雁坂嶺（峠）を越えて、栃本番所（関所）に至る「雁坂みち」があったことが記載されています。また、「峠上下凡ソ八里無人ノ境也」と紹介された難所であることがわかりますので、武田信玄も大軍で峠を越えることはさぞ難しかったろうと思われます。

紅葉が真っ盛りの中、塩山駅から満員の山梨交通バスに揺られて「道の駅・みとみ」につきます。紅葉狩りのシーズンも終わりに近づき、駐車場は多くの車で賑わっていました。新久渡の沢橋のすぐ北側のシラカバの横に雁坂峠登山口の道標があり、ここが旧秩父往還の雁坂峠への入口です。左折して沢に沿って落葉に埋もれた車道を進み、右にカーブして久渡の沢橋を越えると茶色の道標「雁坂峠登山道入口」があるので左折します。砂利道を進むと正面に標識「雁坂峠登山口」及び登山道ガイドマップ（三富村）の大きな説明板が設置されています。

道の駅みとみ

雁坂峠登山口の道標

久渡の沢橋

道標に従って車道を右折します。砂利道の横の倒れた古い道標「雁坂峠→」を過ぎると、まもなく広い車道に合流し、道標「雁坂峠→」及び「雁坂峠－広瀬」があります。左折して落葉の道を進むと左前方に雁坂トンネルから延びる高架橋が樹林を通して望めます。前方の巨大な高層ビルを見上げるような雁坂トンネル高架橋の下を潜って進みます。紅葉の樹林中の緩やかな登り道をのんびりと進むと、左側下方に雁坂トンネル有料道路料金所や駐車場が木々の間から確認できます。

道標とガイドマップ

雁坂トンネル高架橋

雁坂トンネル料金所

久渡沢に沿って色とりどりに紅葉した山々を眺めながら車道を進むとカラマツ林となり

ます。少し下ってガードレールが両側に設置された立派な沓切沢橋を渡ると本格的な登りとなり車道から山道へと変わります。橋のすぐ先に丸太の倒木の間に茶色の道標「雁坂峠」及び「広瀬・道の駅」が二段になって設置されていました。

カラマツ林

沓切沢橋

道標「雁坂峠」

落葉を踏みしめながら緩斜面の巻き道を進むと右側に標識「←ナメラ沢へ」があます。落葉樹の斜面は見通しが良好で、左下の沢に下れそうですがかなりの急斜面です。巻き道の途中に右側から水量豊かな沢が流れ落ちていて、渡渉の安全の為か頼りなさそうなトラロープが１本、だらりと設置されています。小沢ですが急傾斜がまっすぐに下っていて、凍結時には要注意の場所です。

落葉の巻き道

ナメラ沢への道標

トラロープ設置の渡渉

広葉樹林の枯れ葉が大部分落ち切った明るい緩斜面で昼食となります。沢沿いの巻き道を進み、右側にトラロープ設置されたガレ場を過ぎると、右側から小さな支流が合流するので少し上部で渡渉します。白地に黒文字で「広瀬－雁坂峠」と記された古い道標を過ぎると峠沢に架かる丸木橋（腐れかかった大小３本の丸太が並べられています）を注意して渡ります。以降は峠沢の右岸の巻き道になり雁坂峠へと向かいます。

ガレ場のトラロープ

小沢を渡渉

丸木橋

沢沿いの登山道の古い道標「広瀬－雁坂峠」（木製で茶色地に白文字）の先にトラロープが設置（左側に 10mほど）されています。苔むした石の上に古い金属製道標「広瀬－雁坂

峠」（白地に黒文字）置かれた場所の先で、左上から流れ落ちる小さな枝沢を渡渉します。

古い道標「広瀬－雁坂峠」

金属製道標「広瀬－雁坂峠」

枝沢の渡渉

ササで覆われた明るい尾根を登ると道標「雁坂峠－広瀬」（茶色地に白文字）があり、枯れ葉がすっかり落ちたカラマツ林となります。ササ原に覆われた針葉樹林帯を急登すると前方が開け、前方右側に奥秩父主稜の稜線が見えてきます。

ササの尾根

道標「雁坂峠－広瀬」

奥秩父主稜の稜線

開放的なササ原を登り切ると木製のテーブル及び道標や説明板が林立した雁坂峠につきます。ここには昔から設置されていた古く壊れかけた道標「日本三大峠・雁坂峠」が健在でした。また雁坂小屋への分岐には新しい道標「道の駅みとみ🅿広瀬・雁坂トンネル料金所🅿」、「雁坂小屋　川又・豆焼橋・出会いの丘🅿」、「水晶山、雁峠、笠取山」及び「甲武信ヶ岳、雁坂嶺、甲武信小屋」があり、4 方向の分岐となっています。道標の下部に「平成 29 年 1 月 1 日、雁坂小屋附近（突出峠方面）で凍結による滑落死亡事故発生、凍結時は必ずアイゼンが必要です。」と凍った沢を越える際に起こった有名な滑落事故の対応策が示されていました。新しい円柱状の道標「日本三大峠・雁坂峠 2082m」の横に「秩父多摩甲斐国立公園地図」及び「安全登山　雁坂峠　一九七七米」と記された石碑があります。

雁坂峠の古い道標

雁坂峠

分岐の道標

大きな説明板には「秩父往還の歴史　雁坂峠と秩父多摩甲斐国立公園　雁が越え、人々が歩いた日本最古の峠道、三伏峠（南アルプス、2580 メートル）、針の木峠（北アルプス、2541

メートル）とともに日本三大峠のひとつである雁坂峠（2082 メートル）の歴史はふるく日本書紀景行記に日本武尊が蝦夷の地平定のために利用した道と記されていることから、日本最古の峠道といわれています。また、縄文中期の遺物や中世の古銭類なども数多く出土している他、武田信玄の軍用道路・甲斐九筋のひとつとしてもしられています。さらに、秩父往還とよばれたこの道は、秩父観音霊場巡拝の道として多くの人々が通り、江戸時代から大正までは、秩父大滝村の繭を塩山繭取引所に運ぶ交易の道として利用されてきました。一般国道 140 号となった現在は奥秩父をめざす山道として秩父多摩国立公園の豊かな自然とともに登山者に愛されています。雁坂峠の名は、このあたりが雁の群れの山越えの道であった事に由来しているとも伝えられています。　歴史が越え、昔人が越えた雁坂峠、ここは美しい自然と遠く長い歴史があります。　環境庁・埼玉県」と雁坂峠の歴史が記されています。更に甲州らしく説明板の左側には武田信玄らしき部将が白馬に乗った後ろ姿が描かれていました。

日本の古代史を代表する英雄の一人である日本武尊が、この雁坂峠から奥秩父の山並みを楽しまれたのではないかと想像すると感慨深いものがあります。雁坂峠が日本三大峠の一つに数えられる理由も日本武尊伝説に由来するものと推測できるのではないでしょうか。ただし、古事記（倉野憲司校注）の、景行天皇の小碓命（後の倭建命のこと）の東征の条には「足柄の坂本に到りて、・・・故、その坂に登り立ちて、三たび歎（なげ）かして、『吾妻はや。』と詔（の）りたまひき。故、その國を號けて阿豆麻（あづま）と謂ふ。すなわちその國より越えて、甲斐に出でまして、酒折宮に坐しし時、歌ひたまひしく、『新治　筑波を過ぎて　幾夜か寝つる』とうたひたまひき。・・・その國より科野（しなの）國に越えて、すなわち科野の坂の神を言向けて、尾張國に還り来て、」と甲斐の酒折宮から信濃國に向ったことが記されていますが、雁坂峠を越えたとは明記されていません。

また少し遅れて成立した日本書紀（現代語訳　宇治谷　孟著）には「日本武尊がいわれるのに、『蝦夷の悪い者たちはすべて罪に服した。ただ信濃國、越國だけがすこし王化に服していない。』と甲斐から北方の、武蔵・上野をめぐって、西の碓日坂にお着きになった。日本武尊は常に弟橘姫を思い出される心があって、碓日の峯にのぼり、東南の方を望んで、三度歎いて『吾嬬（あずま）はや（わが妻は、ああ）』といわれた。それで碓日嶺より東の諸国を、吾嬬國（あずまのくに）という。」と、日本武尊が甲斐から武蔵國と上野國を経て信濃国に向ったことが記されていますが、どこの峠を越えたのかは不明瞭です。

一方、武州三峯山「當山大縁起」（山岳宗教史研究叢書 17）には「夫三峯大権現の由緒を尋奉るに、爰に人皇四十四代の帝元正天皇養老年中、一品舎人親王詔を蒙、國史を撰し給ひ、名付けて日本書紀と號す。其の巻の五に曰、十二代帝景行天皇即位四十年、東國夷大に帝に背き、依之第二皇子日本武尊勅を蒙らせ給ひて東ニ下り給ふに、始駿河國より相模國武蔵を經て常陸國に至給ふ、此時東の夷等悉王威に伏奉る。明年三月皇子夫より甲斐國に至、酒折の宮に留り給ひて、暫軍勞を休め給ひ、四月三日再北轉を經て武蔵上野國に至給ふと云々。當山の古記に曰、日本武尊酒折宮よりきためくりへるの土地、雁阪の山を越して直に當山に

登給ひて、遥かに國中の地理を望、・・・」と酒折宮で休憩された日本武尊は信濃國に向う途中で雁坂を越えて三峯山に詣でたことが記されていますので、「雁坂峠越え」伝説の根拠の一つと推測されます。

雁坂峠の別の説明板には「峠付近の植生　奥秩父の山には雁（がん）のつく地名がいくつかみられる。雁道場（突出峠から少し下った場所）は、雁の群れが山を越す前にひと休みする場所、雁坂峠から雁（がん）峠にかけての上空は、かつて雁の群れが山越えをしたことから名付けられたといわれている。雁坂峠の稜線一帯には、山地草原がみられる。この草原は山火事などによる森林破壊後の風のあたる斜面に成立した草原で、シモツケソウ、オオバギボウシ、ミヤコザサ、イブキトラノオ、イタドリ、アキノキリンソウ、シモツケソウ、ミヤマヨメナ、カラマツソウ、シシウド、マルバダケブキ、グンナイフウロ、キソチドリ、などが生育している。雁峠にも同様の草原が見られる。一方、雁坂峠の埼玉県側の斜面には、高木層にコメツガとトウヒの優占する亜高山針葉樹林が見られる。亜高山層はシラビソ、オオシラビソ、トウヒ、低木層にはコヨウラクツツジ、サビハナナカマド、ミネカエデ、シラビソ、草木層にはマイヅルソウ、ミヤマカタバミ、カニコウモリ、オサバグサ、バイカオウレンなどによって構成されている。　環境庁・埼玉県」など、雁坂峠の地名に関する考察及び植生が紹介されていました。

雁坂峠にて

「秩父往還の歴史」説明板

雁坂峠では、一時的でしたが、天候が悪化して霰のようなものが落ちてきました。わずかに雪が残る雁坂小屋に下る斜面に「秩父山地緑の回廊　野生動植物の相互交流を図る森林生態、保護にご協力下さい。林野庁・埼玉森林管理事務所」の白い注意板が横たわっています。山梨側の紅葉が真っ盛りとなった明るい斜面に比べ、針葉樹林に覆われて見通しが悪い秩父側の鬱蒼とした斜面を下ると、前方に青い屋根の雁坂小屋が見えてきます。小屋の手前には道標「雁坂峠・甲武信ヶ岳－水晶山・雲取山」と奥秩父主稜縦走路への分岐があります。また、川又への下山口には道標「川又 9.5KM、30m下水場－雁坂峠」があり、水場の場所が示されています。

雁坂小屋へ

雁坂小屋

奥秩父主稜への分岐

雁坂小屋は管理棟と宿泊棟の 2 棟に分かれています。宿泊棟の内部は、薪ストーブが設置された土間と椅子及び食事場所が入口にあり、奥の部屋は 2 段ベッドが左右に並んだ昔ながらの山小屋の雰囲気が残されています。小屋の右側に標識「黒岩尾根登山道入口－豆焼橋まで 8.2km」があり、トイレの先のテントサイトから黒岩尾根を経由して豆焼橋に下るコースも案内されています。雁坂小屋のトイレは、かつて「便所国道」と紹介され、国道 140 号がトイレの中を通っていたとして知られています。しかし、国道 140 号は秩父往還として、突出峠経由で雁坂小屋に向かうコースのことであり、黒岩尾根コースの上にあるトイレは秩父往還を通らないことは明確です。

また、未確認の情報ではありますが、かつての秩父往還は地蔵岩付近から現在の雁坂小屋への巻き道を通らずに、孫四郎峠（地蔵岩分岐近くから雁坂嶺に尾根通しで登るルートの地蔵岩付近の鞍部と推測さてますが、実際の峠の場所は確認しておりません。）から雁坂嶺経由で雁坂峠に至るルートがあったのではないかと指摘されています。元の雁坂峠は今より少し雁坂嶺寄りにあったが、台風等の被害を受けて現在の雁坂峠の位置に移動させられているとの情報も知られています。大久根茂著「秩父の峠」に「雁坂小屋が作られる以前は、この海抜二、〇〇〇メートル付近からさらに尾根へと登り、孫四郎峠という鞍部を一つ越えて直接雁坂峠に出る道だったという。この孫四郎峠の名の由来が面白い。昔、栃本に孫四郎という人がいて、よく山の案内をした。あるとき、雁坂峠までの道案内を頼まれたのだが、孫四郎は峠まで行かず、一つ手前の鞍部を雁坂峠だと教えて帰ってきてしまった。それからそこを孫四郎峠と呼ぶようになったのだという。」と峠名の由来を紹介しておりますので、栃本付近ではよく知られた峠のようです。一方、明治 43 年測図の地形図「金峰山」には黒岩尾根の肩に雁坂小屋の記載がなく、孫四郎峠付近から現在の巻き道よりも西側（雁坂嶺に近い）を巻いて直接雁坂峠に至る道が記されています。雁坂小屋付近の巻き道は風雨による斜面の崩壊等で、頻繁に道が付け替えられた可能性が高いものと推測されます。明治期以前には、旅人の安全を確保するために、巻き道よりも遠回りになりますが、孫四郎峠付近から尾根筋を利用して雁坂嶺に達する尾根道で、雁坂峠に下る道があったとしても不思議ではありません。

夕刻、宿泊棟の発電機の故障で、室内灯が消えてしまったため、急遽、ランプ生活となりました。ただし、薪ストーブ（保温性に問題あり）のおかげで暖房ややかんのお湯を使用できたことは幸いでした。

雁坂小屋の宿泊棟　　雁坂小屋のトイレ　　川又への道標

雁坂小屋の翌朝は、眩いばかりの「日の出」を 6 時過ぎに確認し、7 時少し前に快晴の空の下で雁坂小屋を出発しました。「川又」への道標に従い巻き道を下ると松の大木に標識「水左横」がつけられていて、左上に青いドラム缶の中にホースで水が導かれています。

少し下ると標識「この先冬季凍結の恐れあり、滑落注意！　埼玉県」があり、左側斜面に水道管が固定された涸れ沢のトラバースになりますが足元はしっかりとしています。落葉した広葉樹の明るい水平な巻き道を 20 分ほど進むと豆焼沢の最上部の水量豊富な沢を渡渉（雁坂小屋の貯水槽があり、昇竜の瀧がある。）します。豆焼沢は一気に下まで降っている上、橋は架けられてないので、凍結時のトラバースには細心の注意が必要です。

雁坂小屋の日の出　　標識「水場へ」とドラム缶　　豆焼沢の渡渉

渡渉から数分進むと登山道に標識「迂回路」があり、台風のためか土砂崩れや斜面に倒れた木々が散乱しています。ここから左上方に崩壊箇所を高巻きし、カラマツ林の中を十数分進んだ所に標識「迂回路」があり、元の登山道に合流します。迂回路が作られるまでは突出峠コースは通行禁止になっていたとのことです。ほぼ水平な巻き道を辿るとカラマツと針葉樹（コメツガ・トウヒなど）やアセビの群落などがあります。左側斜面にクサリ場となったガレ場がありますが、足場はしっかりとして明瞭な登山道です。

迂回路で左上方に　　カラマツ林　　ガレ場のクサリ場

カラマツ、アカマツや針葉樹などの混合樹林帯を貫く旧道の左側に、朽ちた道標「雁坂峠

ー川又 7.2km」（下部か熊にかじられているようです。）があり、薄暗い針葉樹に変わると地蔵岩展望台への分岐です。真新しい道標「地蔵岩」・「雁坂峠 3.2kmー川又 7.3km」が設置されています。アカマツの大木に「地蔵岩展望台　うっそうとしたトウヒ・コメツガの原生林の巨木の中を歩く突出コースの中で、明るく周囲の山々を見渡すことのできる場所。雁坂嶺・東西破風山・甲武信ヶ岳、三宝山と山々が続き壮観な眺めです。ここから 5 分もあれば岩の上へ行けます。　小屋へ 2.5km　小屋へはここから巻き道になります。晴れていたら絶対おすすめ！！」の説明板が括りつけられています。分岐から不明瞭で急な踏み跡を登ると 5 分足らずで地蔵岩の上に出ます。雁坂嶺、甲武信ヶ岳、三宝山などの奥秩父主稜の山々が谷を挟んで眺められます。

朽ちた道標

地蔵岩展望台への分岐

地蔵岩から雁坂嶺方面

地蔵岩展望台の分岐からは針葉樹に囲まれた登山道となり、古道の雰囲気が残されています。十分ほど進むと右側に古い道標「雁坂峠ー川又」があり、その先に赤い金属標識「境界見出標・東京営林署」及び気象観測用の器具などがありますが、ここから登山道は左に折れます。下りが始まる場所に針葉樹（コメツガまたはトウヒ？）の大木に巻き付けられた標識「足元注意・ここはだるま坂、この先ずっと下り坂です。川又へ 6.8km」が確認できます。大木の反対側には「だるま坂　ご苦労様です。長い雁坂峠への道もこのだるま坂が最後の登り坂です。この先 300M 右側の地蔵岩展望台入口を過ぎると小さな登降をくり返す巻き道となります。景色がひらけ前方、黒岩尾根の肩に雁坂小屋が見えてきます。ご安全に！　1191 と書いてからはや 20 数年。巻き道の樹林も伸びて、落葉の時期でないとなかなか雁坂小屋も見えにくくなってしまいました。『ご安全に』は昔も今もかわりません。2013.10」と山小屋関係者の手製と推察できる看板が巻き付けられていました。川又からの長い苦しい登り道が容易に想像されます。

古い道標「雁坂峠ー川又」

境界見出標

だるま坂の標識

コメツガまたはトウヒの雑木林に囲まれた足場の悪い巻き道を十数分下ると、針葉樹とササの明るい尾根道に変わり、道端にはアセビなども確認できます。前方の視界が開け、針葉樹とササの緩斜面に変わると、平坦になった鞍部にログハウス風の外観を持つ樺小屋につきます。道標「川又 5.6km－雁坂峠 4.5km」があります。小屋の内部は窓が大きく明るい十畳程度の居室の前に、薪ストーブの置かれた土間があり、避難小屋にしては清潔感が溢れています。小屋の入口には「樺小屋（かばこや）　古老の話によると昔この道が『秩父往還』と呼ばれ、秩父と甲州を結ぶ生活道路だった頃、ここに今でいう避難小屋的ものが有ったそうです。その後も山仕事の人々にも使われたようです。今でも水場へ向かう途中には、食器のかけらなど見られます。今の小屋は、およそ 20 年ほど前に建てられました。　水場：小屋の前の登山道を雁坂方面に 15m。大木の後の案内板を左へ。水場まで 5～6 分。出ていないこともあります。」が掲示されています。かつて秩父往還が峠越えの道として賑わった頃から、旅人や山仕事の人達に利用された避難小屋のようです。川又から雁坂峠までの長い上り坂の途中にある樺小屋は、旅人にとって貴重な避難小屋であったと思われます。

サササの明るい尾根道

アセビなど

樺（避難）小屋

小屋の横には説明板には「樺小屋附近の主な樹種　ダケカンバ、コメツガ、ウラジロカンバ、ウダイカンバ、ミネカエデ、オガラバナ、サビハナナカマド、ヒロハツリバナ、ミネザクラ、コヨウラクツツジ、サラサドウダン」及び「森林埴生　かつて、この付近一帯はダルマ坂や地蔵岩付近にみられるようなコメツガ、シラベなどからなるうっそうとした亜高山針葉樹林に覆われていましたが、1959 年（昭和 34 年）9 月の伊勢湾台風によって、未曽有の森林被害が発生し、景観は一変してしまいました。現在、この付近に数多くみられるダケカンバの優占する林分は、風害直後に芽生えた稚樹から再生した林分です。ダケカンバの優占林分の下層にはコメツガやシラベの若木が生育していますが、これらの多くも風害後に芽生えたもので、上層のダケカンバとほぼ同じ樹齢です。コメツガに比べてダケカンバの成長速度が早いために、このような群落状態を呈していますが、元のコメツガ林に近い状態に回復するには数百年かかります。　環境庁・埼玉県」と記され、秩父往還を取り巻くこの一帯も伊勢湾台風による被害が大きかったことが理解できます。

樺小屋内部

入口に説明板

樺小屋附近の主な樹種の説明板

コメツガやササに覆われた緩斜面の尾根を下り、立ち枯れたアカマツの大木や倒木のある広い尾根を 40 分ほど下ると、アカマツの根元に「東京大学科学の森里親」の看板が出てきます。この一帯は東京大学農学部秩父演習林であり、この先が突出（つんだし）峠です。道標「川又 5.5km－雁坂峠・雁坂小屋 5.3km」は横板の下部の一部がクマにかじられた跡があります。また、古く朽ちた道標「突出峠」の残骸が斜めになりながらも何とか建っています。近くに今は利用されてないと思われる古い百葉箱が放置されていました。白い百葉箱の下に「このコースはその昔甲州武州を結ぶ唯一の街道で、國越の人々や荷物の往来がさかんだったと言伝えられて居ります。交通機関の発達と共に現在は山を愛するハイカーのコースと変わって参りました。雁坂峠に登るには突出峠まで登るのが苦しいコースで、これからはゆるやかなコースとなり、峠まで達します。　大滝村」と記された腐食が進んで文字が判別しがたい説明板が残されています。秩父往還の川又から雁坂峠にかけての峠道を登る地元の人たちや、旅慣れた人々にとっても頑張りどころだったと思われます。

コメツガやササの尾根

突出峠の標識

古い百葉箱

また、「東京大学の森」育成基金記念樹などの標識もブナの大木の根元に設置されています。更に「東京大学農学部附属演習林は、林学・林業に関する基礎的および応用的な試験・研究を行い、あわせて学生実習の用に供する目的で設置されたものです。私たちの生活をより豊かに発展させる森林を愛し、樹木を大切にしましょう。林内のたき火・たばこなどの火のあつかいには十分注意しましょう。　秩父演習林」が掲示され、演習林の役割が説明されております。この付近は「秩父甲州往還」調査報告書には「ナラ・モミなどの原生林である。」と記されています。

秩父演習林周辺

育成基金記念樹

東京大学科学の森里親

旧秩父往還らしく、道幅の広い溝状に凹んだ歩きやすく緩やかな道を下ると右側に看板「人口植栽地・カラマツ・シラベ、東京大学農学部秩父演習林」が掲示されていて、植林された樹種が分かります。道標「川又ー雁坂峠」・「行き止まり」を左に進むと、朽ちた道標「川又ー雁坂峠」があります。ここにはかつて黒文字橋へ下る「黒文字橋」の標識が東向きにつけられていたと古い写真に記録されていますが、現在は分岐を示す道標も踏み跡も見当たりません。「山と高原地図　雲取山・両神山 2021」に登山道の記載はありませんが、国土地理院 2 万 5 千分の 1 地形図「中津峡」には黒文字橋への登山道が明記されています。しかし、道標の傍に「この先の林道・歩道は東京大学演習林が森林の管理作業や教育研究活動のために使用しているもので、登山道ではありません。大変危険ですので登山目的での通行は禁止します。　東京大学秩父演習林」と注意が記され、一般の通行はできないようです。更にそのすぐ先の右下に踏み跡があり、分岐に小さな標識「R140」（白い四角状の細長い金属プレート）が枯れたホウ葉に埋もれて設置されていますので、国道 140 号（黒文字橋）への分岐であることが分かります。

旧道らしさが残る道

道標「川又ー雁坂峠」

朽ちた道標「川又ー雁坂峠」

数分先に進むと道標「雁道場」があります。アカマツの大木に「雁道場（がんどうば）、毎年秋に雁の群れが南に飛んでいく時に、山を越す前ひと休みした場所らしいです。雁坂峠、雁峠などこの辺が渡り鳥のルートのようです。黒文字橋から上がってくるルートがこの先にあります。」が掲げられています。雁坂峠の周辺は、「雁」に因む地名が多数残されていることから、雁が尾根を越え、休憩した場所であるとの推測も理解できます。また、雁道場は岩道場とも表記されています。

標識「R140」

道標「雁道場」

雁道場の説明板

旧道らしく歩きやすい道を下り、涸れた小沢に架けられた丸木橋（3 本の腐食した丸太）を渡り、植林された杉の根元を金網で囲んだ鹿除けネットなどを眺めながら植林された杉林を過ぎます。杉の木に道標「雁坂」が付けられた個所を左下に曲がると、杉の枯れ葉の中に倒れた道標「雁坂峠ー川又」及び「県営林　植物や土砂の採取を禁じます。山火事を起さないよう注意してください。埼玉県」の注意書が隠れています。広範囲に渡る東京大学演習林と県営林との境は確認できませんでした。

丸太橋

スギの鹿除けネット

道標「雁坂峠ー川又」

杉の大木に標識「水の本」の説明板が括りつけられていて「水の本　水の元、一杯水とも言う　秩父と山梨を結ぶ秩父往還は昔から交通の要衝。水の出るここや樺小屋には峠を行き来した人々のための避難小屋的な物があり、それは山仕事にも使われたとか。2015 年の登山地図から『水の本』名前だけ残し、「水」のマークは削除された。」及び「お地蔵様には安永六年（1777 年）、江戸中期の年号が刻まれている。17.11」と、かつて水場及び避難小屋らしきものがあったことが記されています。また、お地蔵様と記された石仏が杉の大木の根元の自然石の石組みの上の台座に鎮座しています。頭部は消失していたらしく、自然石が頭部の代わりに載せてあります。石の坐像で、両手を前で組んだ上に宝珠がありますが台座に記された文字は判読できません。一方、「秩父甲州往還」には「水の元観音　安永六年　観音菩薩像、水場に祀られた観音像なので、水の元観音といわれる。」と記されています。石仏の頭部が損失しているため、残念ながら地蔵様か観音様が判断できません。

標識「水の本」　　観音菩薩（地蔵様？）像　　スギ林

杉の植林帯を下ると道標「川又－雁坂峠」及び石の道標「後ハ栃本ヲ経テ三峯山及ビ秩父方面ニ至ル、右ハ甲州旧道」・「勅諭下賜・・・」・「大正十一年銘」があります。「秩父甲州往還」には「ここは『矢立篠』といわれ、武田軍が後北条軍と戦闘をした場所であったという。」と戦国時代の歴史を記しています。矢の根や鉄砲玉の跡でも残っていて、夏草でも生い茂っていれば、「兵どもが夢の跡」なぞと往時を偲ぶことが出来たかもわかりませんが、戦いの痕跡は認められませんでした。その先数分で鉄パイプとアルミ板の橋を渡ると左側に山の神の祠（？）があります。まっすぐに尾根を下る道は塞がれていて、道標「川又方面→」に従って右に下ると国道 140 号がすぐ下に見えます。

道標「川又－雁坂峠」　　石の道標　　山の神の祠（？）

国道 140 号に出る場所に道標「雁坂峠登山口」及び道標「雁坂小屋 9.5km・雁坂峠 10.1km」があります。また、大きな看板に「登山者へお願い　次の事を記入して登山ルールを守って入山して下さい。　1. 住所・氏名・職業・年令・連絡先　2. パーティーの名称（人員）　3. 登山ルート　4. 行動計画（登山開始時間・場所等　下山予定日時）　以上の事を『入山届書』に記入して下さい。奥秩父の山を満喫する為に気をつけて入山して下さい。　秩父警察署・大滝村」及び「登山届（計画書）投函箱　設置：さいたま市山岳連盟／埼玉県警察山岳救助隊」並びに「注意　山道では、思わぬ危険が起こりがちです。通行中は常に充分な注意を払って、転倒・転落・落石等の事故防止に努めて下さい。尚、大雨の時や冬期間（12 月中旬～4 月上旬）は危険ですので通行を禁止します。大滝村」などが設置されています。また、「秩父往還の歴史」に関する古い大きな看板がありますが、記載内容は雁坂峠に掲示された説明板の内容と同様です。ただし左側に描かれた絵は雁坂峠では武田信玄でしたが、こちらは日本武尊の後ろ姿のようです。

道標「川又方面→」

下に国道 140 号

雁坂峠登山口

更に「平成 29 年 1 月 1 日、雁坂小屋付近（突出方面）で、凍結による滑落死亡事故発生、アイゼンが必要です。」の張り紙がここにもありました。雁坂小屋への巻き道などでは、沢筋をトラバースする際に冬期は凍結が予想されますので、アイゼン装着はもちろんの事、落石や転倒など細心の注意が必要となります。

国道 140 号の雁坂峠登山口

「登山者へお願い」看板

登山届投函箱

交通量の多い国道 140 号を車に注意しながら川又方面に 20 分程歩くと右側に「入川渓流観光釣場」に下る道（入口）があります。その先は「扇屋山荘」や「川俣公民館」で、入川橋を渡って川又バス停につきます。なお、旅館・扇屋山荘は雁坂小屋の管理人の家でもあります。

川又バス停には「奥秩父案内図　環境庁・埼玉県」の大きな看板と、清潔感のある公衆トイレがあります。「秩父往還いまむかし」に「大滝村の人たちは、秩父大宮への荒川ぞいの道は険しかったので、安全な峠の尾根道を利用して甲州へ出ることが多かった。大正時代までは繭を背負って峠を越え、塩山の繭取引所へ行き、帰りには日常用品を背負って戻った。峠をはさんで両地域の縁組も盛んであった。」と記し、幾世代にもわたる秩父と甲州との交流の深さが偲ばれます。

扇屋山荘

入川橋

川又バス停にて

明治 43 年測図の地形図「三峰」で秩父往還を確認すると、入川と瀧川の合流点である川

又から、入川を渡って瀧川の左岸に近い道を 500 メートル程度南西に進む旧道が記載されていますので、今回調査した石の道標（大正 11 年)）から川又に至るコースは、ほぼ明治期の旧秩父往還であると推測されます。また、大滝村誌に秩父往還に関する川又の記載があり「川又の扇屋の先を左へ折れて入川橋の下をくぐると対岸にわたる八間橋がある。橋をわたると山道になる。少し登ると大正十一年の道標がある。『右へ甲州旧道　後ハ栃本ヲ経テ三峯山及秩父方面ニ至ル』と刻まれている。急な山道を登りつめると平坦な尾根に出る。ここを『雁道場』という。それから東大演習林のカラマツ林を抜け、『突出峠（つんだしとうげ）にいたるとナラ・モミの原生林が見られる。尾根を巻いて登る『ダルマ坂』を過ぎ、道の二又を右に進む（現在は通行不能）と孫四郎峠をへて雁坂峠にいたる。」と記されています。かつては入川橋の下の道を辿って山道に入ったことが分かりますが、今回の調査では国道 140 号で入川橋を渡り「雁坂峠登山口」から旧道に登り、大正十一年の道標へ道を選択しました。

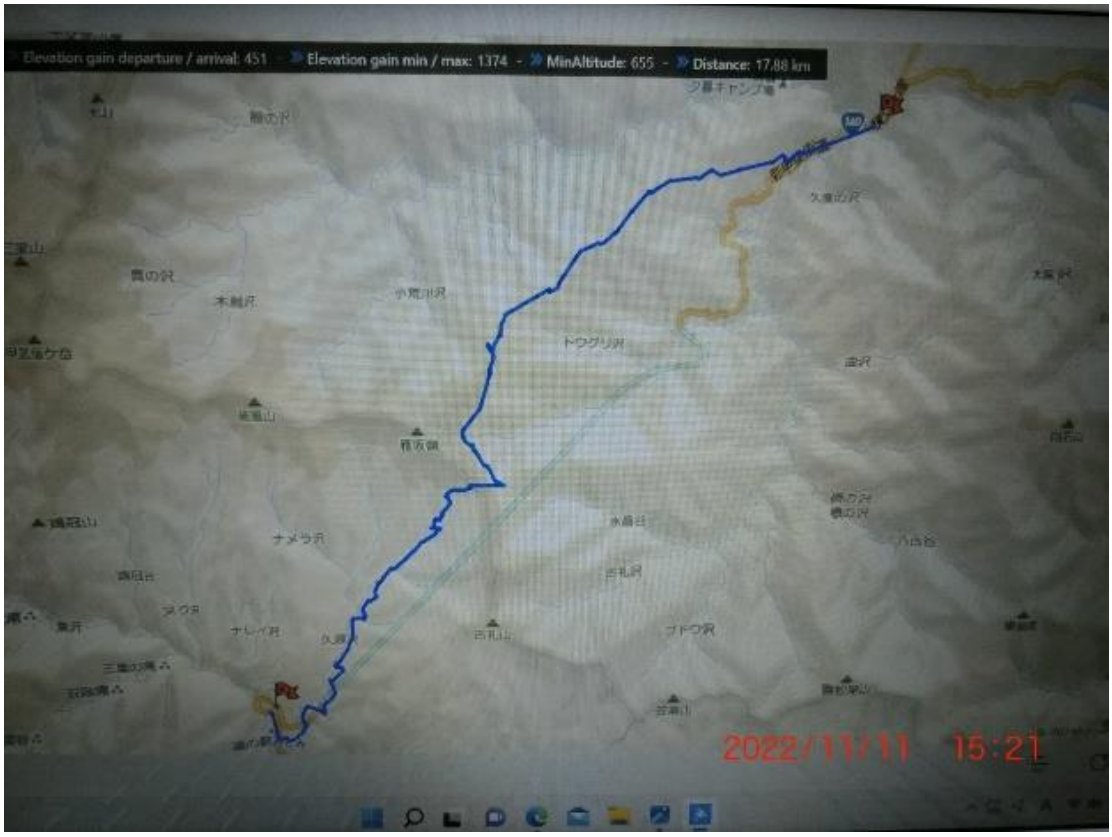
雁坂小屋にて

参考資料

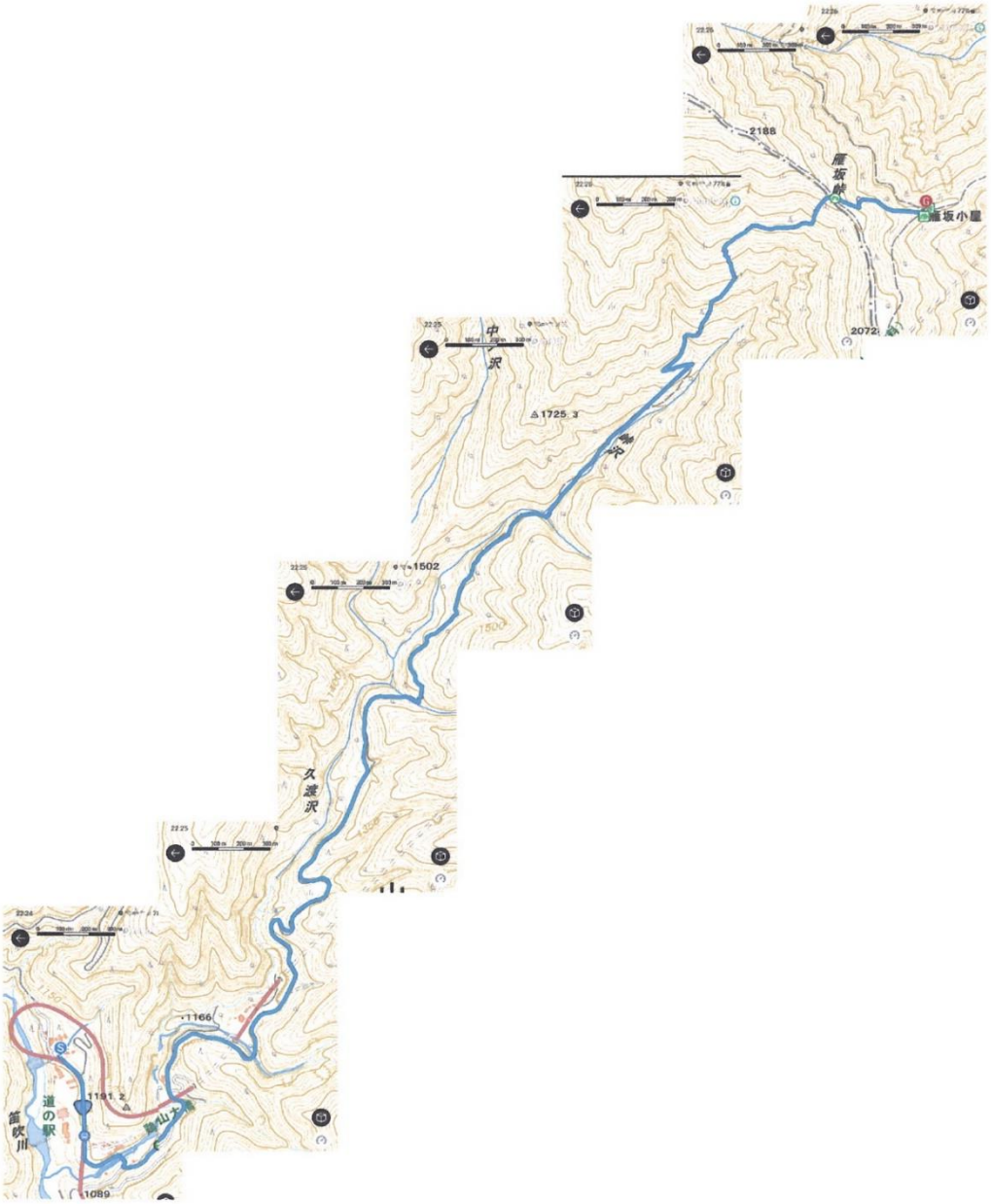
○古道調査・秩父往還（二瀬から大久保地区及び宮平）下見調査報告書
○古道調査・秩父往還（麻生～上中尾～栃本往復）下見調査報告書
○古道調査・秩父往還（贄川宿から強石）下見調査報告書
○古道調査・秩父往還（強石から杉ノ峠経由落合）下見調査報告書
○古道調査・秩父往還（落合～大久保地区）下見調査報告書
○歴史の道調査報告書・第 11 集・秩父甲州往還（編集・埼玉県教育委員会／埼玉県立博物館)、平成二年四月発行
○大日本地誌大系、新編武蔵風土記稿（第 12 巻)・秩父郡・古大瀧村（雄山閣)、昭和四十六年二月二十五日発行

○5 万分の 1 地形図「金峰山」、明治 43 年測図・大正 2.6.30 発行
○5 万分の 1 地形図「三峰」、明治 43 年測図・大正 2.4.30 発行
○古事記（倉野憲司校注、発行者；岡本　厚、岩波書店、2018 年 7 月 25 日、第 88 刷発行）
○日本書紀（現代語訳　宇治谷　孟著、講談社学術文庫　1988 年 6 月 10 日、第 1 刷発行）
○武州三峯山「當山大縁起」（山岳宗教史研究叢書 17、修験道史料集（Ⅰ）、五來　重編著、名著出版、昭和五十八年六月二十日発行）
○山と高原地図　雲取山・両神山 2021（昭文社、2021 年 3 月 15 日発行）
○大滝村誌（編集・秩父市大滝村誌編さん委員会）、発行・秩父市、平成二三年（2011 年）三月三一日発行
○飯野頼治著「秩父往還いまむかし」（さきたま出版会）、平成 11 年 2 月 15 日発行
○大久根茂著「秩父の峠」（さきたま双書）、昭和 63 年 4 月 30 日、初版第 1 刷発行
○国土地理院（2 万 5 千分の 1 地形図）「中津峡」、「雁坂峠」
https://maps.gsi.go.jp/#15/35.948863/138.887632/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1
○YAMAPGPS データ
○ジオグラフィカ GPS データ

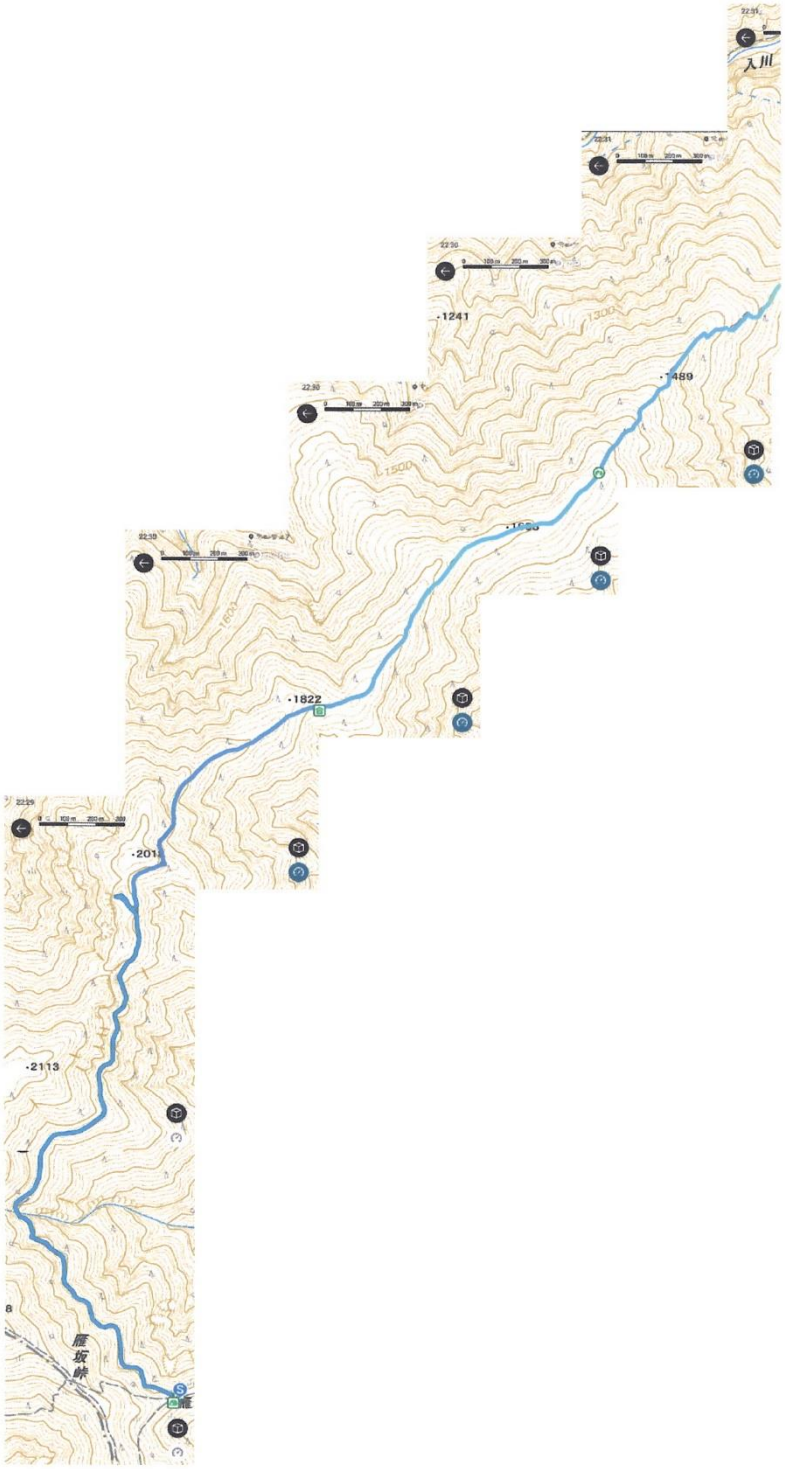
松本敏夫記



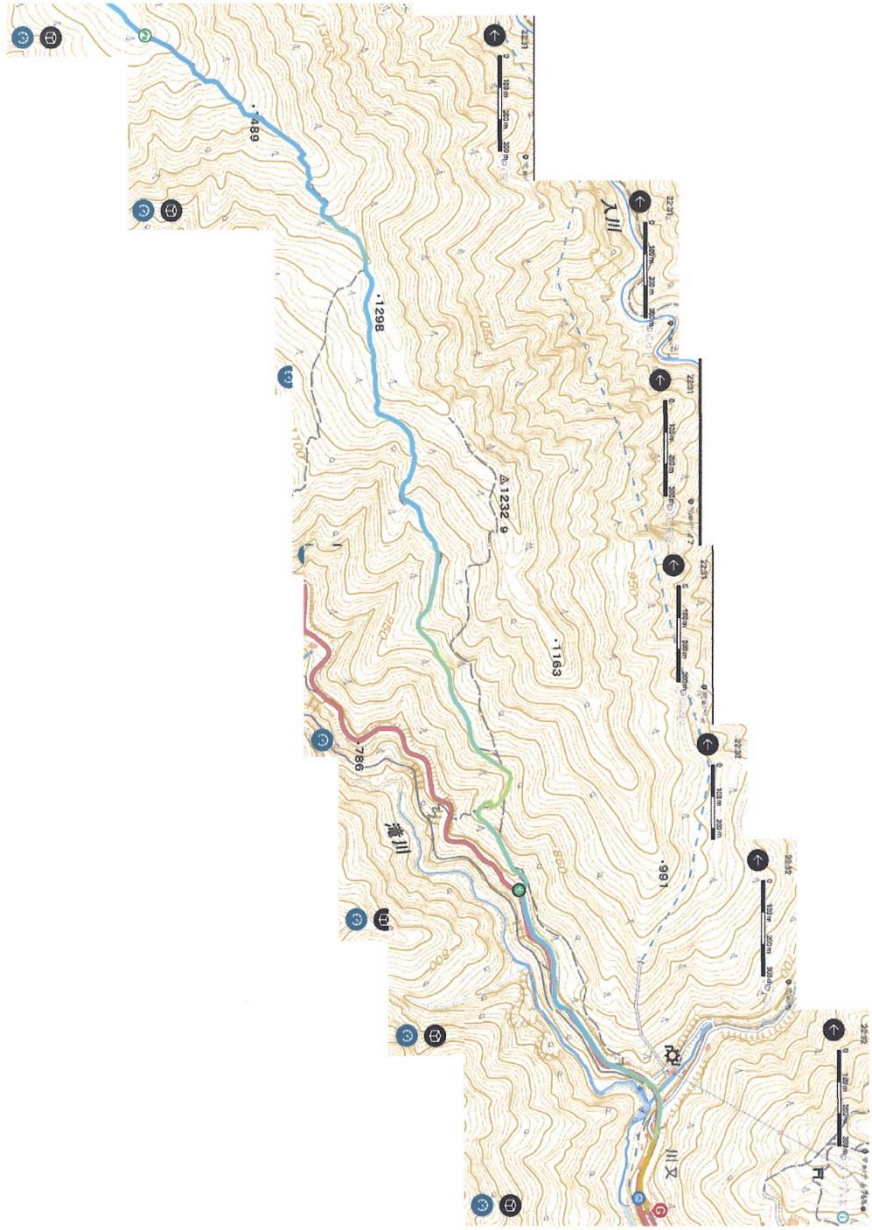
ジオグラフィカ GPS データ（道の駅みとみ～雁坂峠～雁坂小屋～突出峠～川又）



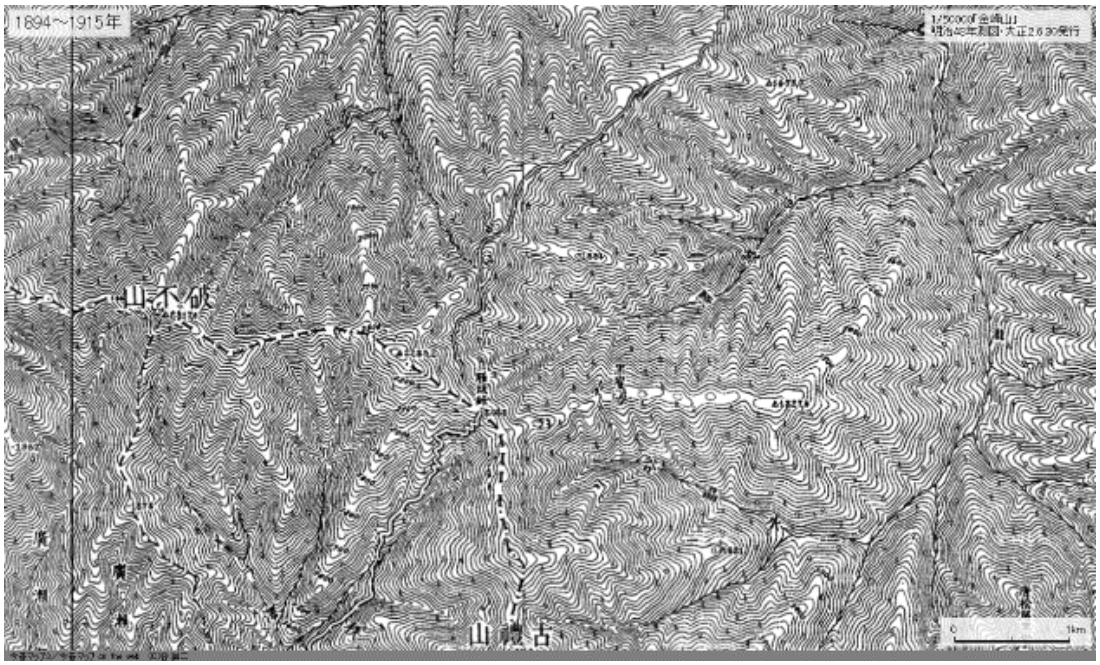
YAMAPGPS データ（道の駅みとみ～雁坂峠～雁坂小屋）



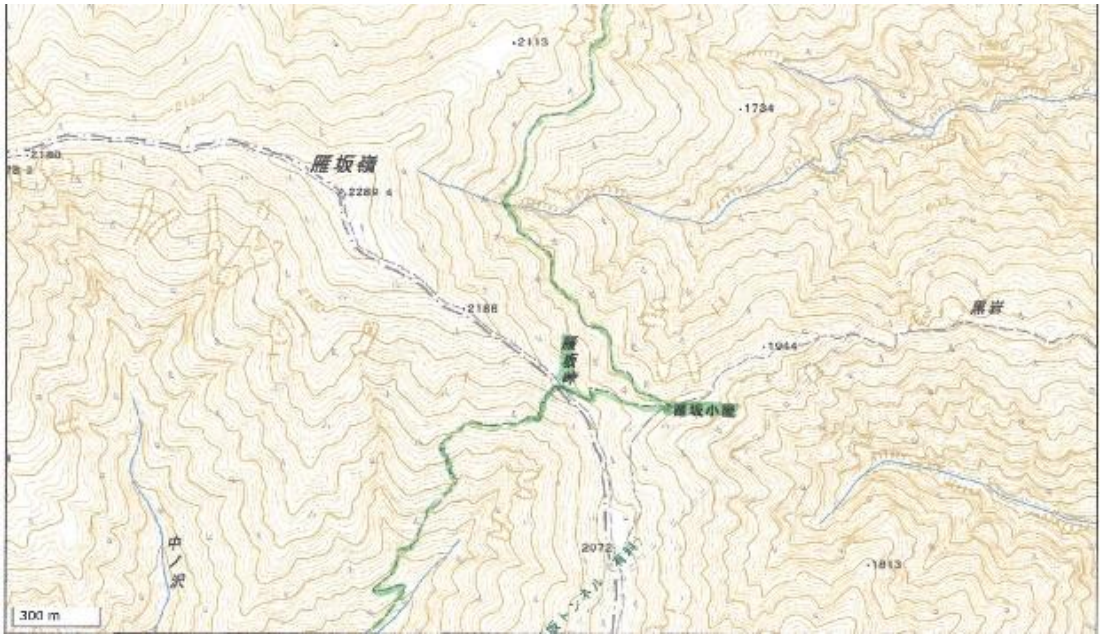
YAMAPGPS データ（雁坂小屋～樺小屋～突出峠～雁道場付近）



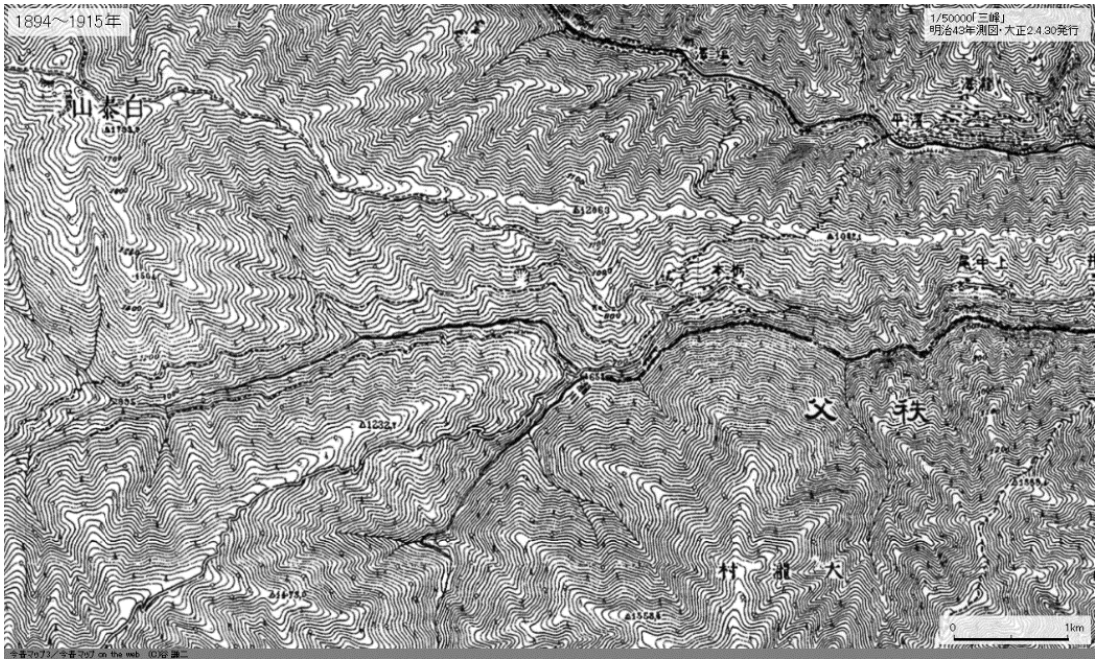
YAMAPGPS データ（雁道場～水の元～雁坂峠登山口～川又バス停）



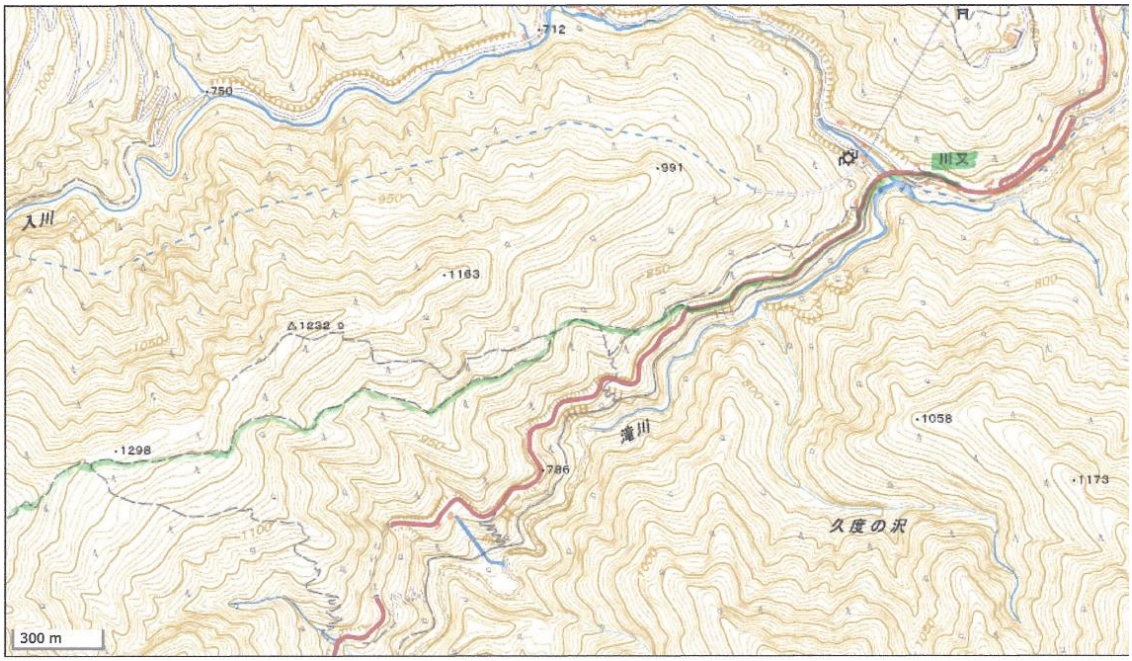
雁坂峠付近（明治 43 年測図）



雁坂峠付近 2 万 5 千分の 1 地形図（雁坂峠・中津川）



川又付近の明治 43 年測図「三峰」



川又付近の秩父往還 2 万 5 千分の 1 地形図「中津川」